

東日本大震災から学ぶ防災教育の実態と課題

佐藤 高則¹, 秋吉 研二², Ahmed Ibrahim Elhossany Elmarhomy², 武岡 大輔², 時久 栞²,
井上 翔太², 小林 大起², 都築 弘充², 村中 貴恵², 森 健太郎², 小野 覚久²,
山本 真由美³, 中山 信太郎⁴

(¹徳島大学大学院理工学研究部, ²徳島大学大学院総合科学教育部,
³徳島大学大学院総合科学研究部, ⁴徳島大学名誉教授)

1. はじめに

東日本大震災から5年半が経過し、被災地域では様々な復興支援活動が行われている。しかし、福島県においては、原子力災害とそれに伴う風評被害という特有の問題が、いまだ地域住民の不安・不信を依然として高めている。

徳島大学大学院総合科学教育部プロジェクト研究Ⅰ(佐藤・中山・山本班)では、これまで福島県の地域住民への支援活動を目的としたプロジェクトを実行しており、徳島大学の福島支援プロジェクト(リーダー:中山信太郎)と連動する形で、大学院生参加型の様々な活動を行ってきた。さらに2015年度および2016年度に実施した公開シンポジウムでは、東日本大震災、特に福島での震災の経験や問題になった課題を、南海トラフ大地震での災害に対して、徳島での防災や減災に活かさないかという課題に取り組んだ。本発表では、2015年および2016年の公開シンポジウムの内容と、参加者へのアンケート結果から、被災地支援と防災教育の在り方について考察した。

2. 2015年度シンポジウム「東日本大震災から学ぶ防災 ～当事者は君だ～」の実施

本プロジェクト研究Ⅰでは、東日本大震災による被災地の経験を基に、発生が予想されている南海トラフ巨大地震に対する地域住民の防災意識の向上を目的として、2015年11月15日に徳島大学地域連携プラザにて、シンポジウム「東日本大震災から学ぶ防災 ～当事者は君だ～」を開催した。本シンポジウムの参加者は約60名であった。

本シンポジウムは基調講演及びパネルディスカッションの二部構成であり、基調講演は小野覚

久氏、中野晋氏、堀井秀知氏に下記の内容でご講演いただいた。

小野覚久氏:東日本大震災で感じた地震・津波の恐ろしさ/中野 晋氏:徳島大学常三島キャンパス周辺の被害予想・避難ガイド/堀井秀知氏:災害に備えるとはどういうことか

基調講演に対して聴衆からは、「避難時の状況や、徳島の人々がこれから注意すべきこと等」、「用意すべき備蓄の量や、自力で避難できない障害者、及び高齢者の避難の支援について」、「マイナンバー制度の防災への活用の可能性や、非常時における合法と違法の線引きについて」などの質問があった。

また、パネルディスカッションでは、基調講演の内容を踏まえ、実際に地震が起こったことを想定しどのように行動すべきか聴衆に問い、その回答についてパネラーに議論して頂く形式とした。パネラーは、基調講演の演者3人に加え米田克彦氏に、司会には西山賢一氏にそれぞれ加わっていただいた。

パネルディスカッションで聴衆に投げかけた設問は全4問で、震災発生直後の初動について、津波警報発表後の状況判断について、避難所の運営について、非常時の連絡手段について質問した。小野覚久氏からは実際



図1 基調講演



図2 パネルディスカッション

の被災経験に基づいた、中野晋氏からは地震災害分野の専門家として、それぞれ御意見を頂いた。また、堀井秀知氏からは弁護士としての法律の観点から、防災士としての減災の観点から御意見を頂いた。そして、米田克彦氏からは、保健管理や公衆衛生、医療の観点から御意見を頂いた。

シンポジウム後に参加者には、シンポジウムの実施内容や防災意識に関する自由記述式アンケートとクリッカーによるアンケートを実施した(N=60 ただし、無回答は除く)。

まず、学生を対象とした自由記述式アンケート結果を一部抜粋する。

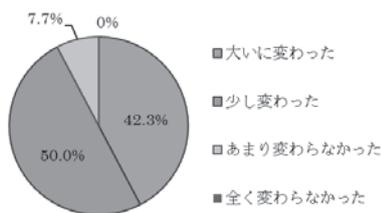
・非常食を買わなければいけないと重く考えていたが、普段家にあるもので良いと知って、避難グッズを備えることに対するハードルが下がり、今からでも用意できるようになった。/・「自分の身は自分で守る」という言葉は、非常に心に響いた。早速「My 非常用持ち出し袋」を作ろうと思った。次もこのような機会があれば、ぜひとも参加したい。

自由記述より、参加者からは防災に対する意識が高まったという感想が多いことから、本シンポジウムの実施は徳島大学生の防災意識の啓発につながったと考えられる。

次に、クリッカーによるシンポジウムの実施内容に関するアンケートの結果では、92%の参加者が本シンポジウムは期待以上だったと回答した。また質問3(下記)では、参加者の約92%が、南海地震に対する意識が大いにもしくは少し変わったと回答した。これらの回答より、本シンポジウムは、東日

本大震災の状況を知ること
で、参加者の南海トラフ巨大地震への防災意識向上に一定の効果があったと考えら

質問3: シンポジウムに参加して、南海地震に対する皆様の意識は変化しましたか?



れる。

3. 2016年度シンポジウム「社会的弱者,特に外国人と女性の視点から学ぶ減災」の実施

過去の東日本大震災での被災地支援や上記2015年のシンポジウムの実施を通して、避難所生活における社会的弱者が抱える問題が浮き彫りになった。2016年度シンポジウムでは、参加者に社会的弱者が震災後の生活において抱える問題点や困難な状況を意識してもらい、巨大地震発生後、避難所での生活における社会的弱者への対応ができることを目標とし、その実現のために必要な課題を提言することも目的として、2016年11月13日に徳島大学地域連携プラザにて開催した。

本シンポジウムは二部構成とし、第一部は東日本大震災の被災地で活動されていた2名の方に、被災地の現状や避難や生活における問題点などについて基調講演を行っていただいた。

土屋和隆氏:被災地復旧計画遅れと現状について
大平久美子保健師:保健師からみた震災が女性と子どもに与える影響~放射線被害を踏まえて~

第二部は東日本大震災など過去の実例の事例をもとに、社会的弱者の中でも特に外国人と女性の避難所生活に焦点を絞り、クリッカーによるアンケートとパネルディスカッションを行った。本発表では、このシンポジウムの自由記述とクリッカーによるアンケート結果から、東日本大震災の経験を生かした南海トラフ巨大地震への防災意識向上と防災・減災教育の在り方について報告する。

4. まとめ

本プロジェクトでは、大学院生教育の一環として、プロジェクト研究Iの受講生が東日本大震災被災地の抱える諸問題と発生が予想される南海トラフ巨大地震への防災意識向上という課題に対して取り組んだ。このような大学院教育を通して、PBL型地域科学と課題解決型研究の実践機会が、地域に貢献できる人材の育成につながると考えられる。